

演題9. 異時性にみられた舌・食道重複癌の1例

○長 浩臣, 宮手 浩樹, 大屋 高德,
工藤 啓吾, 藤岡 幸雄, 佐々木 純*,
金子 良司**, 鈴木 鍾美**

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

*岩手医科大学歯学部外科学

**岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

重複癌は、広義には多発性原発腫瘍を意味するが、狭義には異種類の臓器に病理組織学的に異種類の腫瘍が発生する場合に用いられている。今回われわれは、同種類の扁平上皮癌ではあるが、舌と食道に異時性に発生し、かつ重複癌の範疇に入ると思われる興味ある経過を辿った一例を経験したので報告した。

患者は42歳の男性で、昭和51年5月15日、舌の潰瘍を主訴に当科へ紹介されてきた。来院時は、右舌背部に15×15mmの潰瘍があり、その周囲に硬結が触知され、一部で舌正中線を越え、生検では扁平上皮癌で、WHO分類のGrade IIであった。治療は、両側浅頰頭動脈よりBLM、次いで5-FUの動注と⁶⁰Co、次いでRa針の照射を併用した。約3ヵ月後には、大星・下里分類でGrade IIIとGrade IVの部分が見られたので、そのまま経過を観察した。しかし、約2年後には、反対側の左舌側縁部にcarcinoma in situ様病変がみられ、原発巣同様の扁平上皮癌となったので、初診から約4年後に、同部の舌部分切除術を施行した。その後、経過良好であったが、初診から約8年後に、前胸部から背部への疼痛を主訴に本学第一外科を受診し、食道造影および生検の結果、食道粘膜上皮より発生した髓様癌タイプと扁平上皮癌であった。BLM 60mg 静注後、胸腹部食道切除および後縦隔経路胃挙上頸部食道胃吻合術を施行した。初診から約10年後の現在、経過は良好である。

以上、本例は初診から8年の間に、各々異時性に、左側舌と食道の3ヵ所に発生した扁平上皮癌で、特に舌と食道は重複癌であると考えられた。

演題10. 歯周疾患患者における外骨症の出現状況

○横藤 英夫, 今村 伸一, 摂待 友宏,
大阿久国賢, 梁川 輝行

岩手医科大学歯学部歯科保存学第二講座

顎骨や歯槽骨部の外骨症に関しては、これまでもいくつかの報告があるが、歯周疾患例における外骨症の発現頻度や、病変との関連性などに関する報告は少ない。我々は、歯周疾患患者における外骨症の出現状況や咬合状態との関連についての検索を試みているが、ここでは出現状況について報告する。

検索材料としては、昭和50年から昭和61年までに、本学歯学部附属病院第2保存科を受診した歯周疾患患者の中で、分析可能と判定された729例の診断用模型である。検索対象は顎骨や歯槽骨部にみられる外骨症のうち、口蓋隆起を除いたものである。また、隆起が少なくとも1mm以上を示すもののみを外骨症有りとして判定し、上下顎、左右側別にその出現部位、大きさ、形態などを調査した。形態については、Archerを参考にした上で扁平状、半球状、結節状、棘状の4者に分類した。また、それ以外の関連事項として、咬耗、ブラキシズム、関連歯の動揺、外傷性咬合、咬合異常などについても調査した。外骨症の出現状況に関しては次のような結果が得られた。

(1)出現率は15.6%であった。(2)性差は認められなかった。(3)年代間の出現率は、20歳台で著しく少なく、30～60歳台における出現率はほぼ一定しており、30歳台以降の年齢の増加に伴う出現率の増加は認められなかった。(4)下顎のみの出現が全外骨症例の93%とほとんどを占めていた。(5)両側性に出現するものが76%と多かった。(6)出現部位としては、下顎では犬歯・小臼歯相当部の舌側が、上顎では小臼歯・大臼歯の頬側が多かった。(7)出現形態に関しては、扁平状が最も多く、次に半球状、結節状の順であった。(8)下顎の外骨症の出現パターンは、第1・第2小臼歯パターン、犬歯・第1小臼歯パターン、第1小臼歯パターン、犬歯パターンの順に多かった。

なお、咬耗、ブラキシズム、関連歯の動揺、外傷性咬合、咬合異常については、追って報告する予定である。

演題11. 歯周疾患患者治療3年後の経過観察

○石川 秀夫, 高谷 直伸, 桜田 光男,
清水 隆公, 高橋 通訓, 今村 伸一,
摂待 友宏, 松丸健三郎

岩手医科大学歯学部歯科保存学第二講座

プラークコントロールやスケーリングおよびルートプレーニングなどの基本的な処置は、深い歯周ポ

ケット内の炎症の除去やアタッチメントレベルの改善に有効であるとされている。我々は、これらの基本的な処置が、軽度ないし中等度の歯周疾患患者のポケット深度や骨レベルに対してどのような影響を与えるかについての検索を行い、あわせて歯周外科を施した症例についても比較を試みながら検索した。

被験者は、歯周外科を適用しなかった非外科群患者16名（男性：4名，女性：12名，年齢：29歳～67歳）と歯周外科を適用した外科群患者6名（男性：2名，女性：4名，年齢37歳～54歳）の計22名である。これらの症例に対して、上下顎前歯部を対象とし、初診時と3年後の歯周ポケットと、X線上的の歯槽骨レベルを測定し、その差について統計的検定を行ったほか、治療前と治療後における白線の出現状況についても調査した。

その結果、歯周ポケットについては、非外科群および外科群ともに減少傾向を示していたが、外科群においてのみ有意差がみとめられた。骨レベルにつ

いては、非外科群および外科群とも改善が認められたが、統計的有意差が得られたのは外科群の上顎のみであった。また、白線の出現状況については、外科群の下顎で明瞭化を示すものが多かった。

歯周ポケットの改善が、外科群よりも非外科群で明らかでなかったのは、初診時に4mm未満のポケットが多かったことによるものと思われる。骨レベルは外科群の上顎で改善が認められたが、白線の明瞭化は外科群の下顎で明らかであり、白線の再現がX線上の骨レベルと必ずしも一致しないことを示していると思われる。

歯周疾患の予防は勿論、治療の成否や再発の防止についても、その鍵を握るものはプラークコントロールである。今回は少数例の前歯部に限定して検索したが、今後は症例をふやすとともに、プラークスコアの変動と歯周病変の動態との関連についても報告したい。

次号誌（第12巻3号）について

投稿締切 昭和62年10月15日

発行予定日 昭和62年11月30日

本号誌230頁の投稿の手引きに従ってご執筆下さい。所定の原稿用紙、投稿票、チェック票は学会事務局に備えてありますのでお申し出下さい。

岩手医科大学歯学会編集委員会